



光無きは無限

学ぶこと、生きること、極めること
そこに必ずあったのは「人の縁」
そして「感謝」

特集
A special feature article

書家

酒井真沙

Sakai Shinsa

闇の中でこそ 光は強く輝ける

表裏一体という言葉があるように、表があるから裏がある。光があるから闇ができる。そのため、もし片方が欠けてしまったら、一体でなくなってしまうように感じる。

しかし、考え方を変え、闇の中だからこそ、光はより強く輝くことができる。筆を取り、書を書く男がいる。名を酒井真沙（さかいしんさ）と言い、彼にはほとんど視力がない。

酒井さんの書は、光のない世界で書いたとは考えられないほど力強く、筆舌に尽くせぬ美しさを持っている。

酒井さんが、視力を失っても書続けることができた理由には、人の縁や書道に対する独自の心構えがあった。酒井さんの生い立ちや、書道の世界について紹介する。

練習の虫を経て師範へ

「私くらいの書道家は、箒で掃くほどののに、ありがたいねえ。わっはっは。」

すこぶる明るい酒井さんは、物腰が柔らかく、温かい

口調で冗談を言った。

一般的な書道を始めるきっかけとして、自分の字が下手だからという理由はよく聞かだるう。いまや多くの弟子を持つ酒井さんも、実はその例に漏れなかった。

「私は、教師だったころから字が下手だったけれど、理科専攻なので相手に意志が伝わればいいと思って気にしていなかったんですよ。でも、受け持ちの子に同じ学校の先生の息子がいてね。「酒井先生に授業を教えてもらってから、息子のノートの字がひどいんだあ。」なんて言われてしまったね。わっはっは。」

自分だけならいいが、教える子にまで迷惑はかけられないということ、酒井さんは書道を始めることを決心した。

「同僚の先生たちも一緒にやって書道を始めてくれたんですよ。それが嬉しくてね。」にこりと酒井さん。ただ、周りの先生はどんどん上手になるのに酒井さんだけ7級だったそう。

「えらくプライドが傷ついてね。よし、石の上にも三年。三年間は無我夢中でやろう。と決心したんです。」

その間、酒井さんは同級生なども断り、人との付き合い

も一切絶って文字を書き続けたという。寝る間も惜しんで筆を握り、筆を持ていないときは、体を動かして頭の中で常に文字を書いた。

「そしたらみるみる上達してね。師範という位になることができたんです。」

まさに「練習の虫」であり、酒井さんの意志の強さがうかがえる。

昭和の三筆 手島右卿との出会い

「独学でしてきた書の勉強が間違っていないか確かめたくなつてねえ。東京の先生に就いたんですよ。それも超一流の先生、手島右卿（てしまゆうけい）先生。僕は手島先生の線が大好きでした。」

酒井さんは、自分の話よりも自慢げに、そして嬉しそうに手島先生のことを話した。

酒井さんの師匠である手島右卿先生は「昭和の三筆」の一人だ。独立書人団を結成。小字数の書を確立した能書家であり、書道界の偉人である。

「酒井、お前は目が悪いんだから、書道界の棟方志功（むなかたしこう）になれ。」

手島先生が酒井さんに言った言葉だ。人はそれぞれ目標

を持つて行動する。それは、自分で決心することもあれば、他人からの言葉がきっかけになるともある。酒井さんは、自身に何か怠け癖が出てきそうときは決まって手島先生から言われたこの言葉を思い返し、それを目標に書に励んだ。

「手島先生は人間的にも惚れられるような素敵な人でねえ。僕は先生のこと大好きでした。先生の一言一言がとても嬉しかった。」

目を閉じて言葉を漏らす酒井さんのまぶたの裏には、いつも手島右卿先生の姿が映っているのだろう。

光を失っても打ち負 かされない精神力

酒井さんは生まれつきの弱視であった。小学校では全校生の中で唯一眼鏡を掛けていて、「しこつてるんじゃない。（格好をつけてるんじゃない）。」と上級生からいじめられるときもあったという。

平成12年11月26日、酒井さんが稽古場で弟子の作品を見ていると、急に作品の下が真っ白で何も見えなくなったという。急いで病院にいくと、取り付く島もなく医者に「治

らない。」と宣告された。「希望が無くなつて、本当にショックだね。昼間は家族と話ができるからいいけど、夜になると寂しくて涙が出てきました。」

生まれつきの弱視だったとはいえ、今まで見えていたものが見えなくなる。それは耐えがたい苦痛であった。

しかし、酒井さんは、こんなに涙を流して悩んでも何も生まれてこない。とにかく、目が悪くなつても今が大切なんだ。と自分に言い聞かせ、『今の今を素直に受け止め、素直に生きたい。今の今を大切に。』という詩を書き留めると、沈んでいた心がスッと軽くなったという。実に味わうべき言葉である。

「目が見えないなら、見えない今の今があるのだから、それを大切にして努力すればいいのではないか。そう思い直してまた筆を握り始めたいです。」

果たして、運命はここまで強い精神力を打ち負かすことができるだろうか。否である。今を大切に、そして素直に生きるため、酒井さんは再び筆を振るい始めた。

暗闇はより光り輝くためのステージになった。



酒井真沙の世界

A calligraphy master

万人を虜にする酒井真沙の書
そこには文字に込められた思いと限界のない稽古があった
感動と思いを文字に定着させる唯一無二の世界



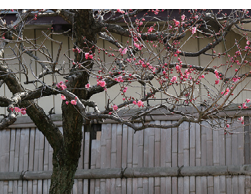
文字の思いを紙に 伝える

書道というものは、我々が普段鉛筆で書く文字の延長線上に位置するもので、文字を墨と筆で丁寧に書いたものと思いがちだ。しかし、それは世間的な考えで、酒井さんとその通説は存在しないことに気がつく。

「書は思いを書くんです。字を書くのではなく、思いを表現するのです。」

酒井さんは、いったいどのようなに文字を決め、書を通して「文字の思い」を表現しているのだろうか。

酒井さんは視力がなかったため文字を読むことができない。そのため、毎日、午前10時か



A story 書のストーリー

【戒】(いましめる)

「昔から、自分は意志が弱いからだめだ。」と自分を戒めることにこだわっていた酒井さん。一度でいいから『戒』という字を書きたかったという。しかし、この字は画数が少なく、格好にならない文字であるため別の字を選ぶよう、師匠である手島先生から言われた。それでも絶対にものにしたかった酒井さん。合宿稽古で一晩「戒」を書いていた。その夜、山のように積もった紙の中で頭だけ出して寝ていると、酒井さんの作品を見た手島先生が枕元で「酒井のやつ、ほかの作品にしろって言ったのに、とうとうものにしたよなあ。」と一番弟子の山崎先生と話していたという。



(C)2014 森賢治



「一時間の「コーヒータイム」を設けていて、お茶を飲みながら奥様に新聞や雑誌、広報紙などを読んでもらうのだ。」「その時に、ぱっと気になった文字、感動した言葉などはノートに書き取っておきます。文字は絶えず頭の中にあります。一年分くらいの文字は常に頭の中に入っていますよ。」

コーヒータイムは、奥様との日常の楽しみの一つであると同時に、文字を集めるための欠かせない時間だ。

「文字が決まると、その文字に対する自分の強い思いを表現するためにはどの墨が、どの筆が、どの紙が合うか考えるんです。」

酒井さんの書は、文字の感動と思いをいかに紙に定着させるかが鍵だ。そのためには、温かい色の墨か、それとも冷たい色か。筆もやわらかい方がいいか、堅い方がいいか、紙はにじむ方がいいか…。

感動と思いを定着させるために、手抜きのないこだわりぬいた最適な道具を選ぶ。

その中で酒井さんが特にこだわっているのが墨だ。酒井さんの墨づくりの腕はいたるところで有名だ。墨は古墨といわれる歴史のある、とても貴重な墨を使い、多種多様な墨を幾重にも掛け合わせ二時間から三時間かけて、ゆつくりと集中して墨を作る。

「今は「初心」という字を書いています。何事にも慣れや情性が出てきます。それではだめだ。いくつになっても筆を持ち始めたときの初々しさ、はつらつとした輝いた心を持つと決心し、「初心」という文字を書いています。」

と、酒井さんはにこりと笑った。そのときの思いを書く。字を書くのではなく思いを書いて、自分の気持ちを表現する。

酒井さんの書の真髄は文字に対する気持ちの強さと言っても過言ではない。

※酒井さんの書に対する思いを「書ストーリー」に掲載。

書く、それは呼吸と気持ちを集めること

書道とは、人間の五感のうちのひとつを視覚に頼って行う。はたして、光に頼らずに文字を書くとはどのような世界なのか。

酒井さんはおもむろに紙を取り出すと壁と紙の間に手を広げた(写真①)。

「こうやって、紙の位置を壁と平行にするんです。」

位置を決めて文鎮をおくと、紙は壁とぴったり平行だ。墨の入ったボウルと筆を手にとると、紙の隅にある文鎮に足を乗せる(写真②)。

「文鎮を踏むことで、紙の

端を理解することができるようです。」

すると、いままで朗らかだった酒井さんの顔つきがかわる。指先に神経を集中させて筆を握り、呼吸を整え、小柄な体を大きく揺らし、体全体を使って筆を走らせる。視力以外の感覚を研ぎ澄まし、全身全霊で文字の思いを紙へ移していく。まるで、まぶたの裏に文字が浮かんでいるかのようだ。

「入ったけ。」文字が紙に収まったかどうか確認する酒井さん。気迫ある動きに圧倒され、ついつい忘れていたが、この方は目が見えないのだ。

「呼吸を整え、気持ちを集中して書くと、100メートル走を走ったように疲れるんです。」

肩を上下させ、息を切らしている酒井さんは、いつもの優しい笑顔でにこりとした。

酒井さんの書の秘訣は、技術もさることながら、今も昔も練習の虫ということだ。長いときは半年間も同じ文字を書き続け、一つの作品を仕上げる。

「紙が千枚あれば千枚書いてしまうんです。」

心・技・体、すべてにおいて一切妥協しない書家、酒井真沙こそ、唯一無二である。

A story

書ストーリー

【観達】(かんたつ)

酒井さんは、宮本武蔵の五輪の書にある「観を強く、見を弱く」という言葉が好きだという。「観」は心で見える。「見」は目で見える。という意味がある。この『観達』という作品は、酒井さんが、観の達人になりたいという思いから書いたのだという。集中して作品に取り組むあまり、「達」の字のしんにゆうのところで、自分の足があることに気がつかず、足の上に筆を走らせてしまった。ところが、そこに自分の足があることすら気が付かないほど集中して書いた作品であったため、しんにゆうのところが白く抜けていても、この作品が一番良いということで採用されたそうだ。



(C)2014 森賢治



書

人の

心

やさしさ、謙虚さ、豊かさ、
誰もが「先生」と呼びたくなる書人の一面

人の縁と共に歩んだ
書の道そして人の道

「ひとに恵まれるのはあり
がたいねえ。」

まるで、神仏に感謝するか
のように、酒井さんの腹の深
いところから言葉が漏れた。

酒井さんは書の達人である
と同時に、人の縁を大切にす
る達人でもある。

酒井さんは生まれつきの弱
視もあって、昔から苦労が絶
えなかったが、それらを乗り
越えられたのは、さまざま
人の縁があったからだ。

小学校では黒板の字を見る
ことが容易ではなかったが、友
達が快くノートを見せてくれ

たので困ったことはなかった。

書の道に入ったときも、同
僚の教員と一緒に始めて始
めてくれた。もし、酒井さん一
人だったら続かなかったかも
しれない。

今は最愛の奥様と家庭を持
ち、一緒にコーヒータイムを
楽しみながら、酒井さんの書
の根源となる文字の題材を一
緒に探している。

酒井さんの周りには、自然
と人が集まってくる。きれいな
花にはたくさんの蝶が集ま
るように、酒井さんの人柄も
まるで美しい花のようである。
物腰柔らかで、優しく、明る
い性格の酒井さんと話をして
いると、いつの間にか先生と

【慕】(したう)



(C)2014 森賢治

生徒の関係になっただけで、いつまでも話をしたい衝動にかられる。酒井さんは書の才は言わずもがな、人に好かれる才にも富んでいる。

いまでも、酒井さんを慕って多くの方が訪れるが、そのなかで酒井さんの弟子ほど酒井さんのことを慕っている人たちはいないだろう。

『酒井先生にはお世話になったから恩返しです。』とあって、はるばる東京から月に4回、稽古を教えに来てくれる弟子がいるんです。先日の大雪の日も東京からやってきて、稽古の前は、教室の前の雪かきをしてくれていました。ほんとうにありがたいことです。』

酒井さんは師匠である手島先生の話をするときと同じく、とても嬉しそうに弟子の話をした。

「僕の目が悪くなってからね、弟子たちが先生の目が悪くならないように、良くな

るようにお参りしますよ。」と言って、三十三観音を5回も回ってくれたんですよ。それと、目にいいといわれる薬師如来のお寺に私を毎月連れて行ってくれて、そこで一緒になつて拝んでくれたんです。弟子たちが本気になつて心配してくれてね。それがありがたくてねえ。」

酒井さんが師の手島先生を尊敬し、敬愛していたように、師を思う心は自然と弟子に受け継がれ、いまでも太陽のように優しく生き続けている。

酒井さんの口から何度も何度も出る「ありがたい」という言葉。ありがたいの語源は「有り難し」つまりめったに無いことの意味である。まさにその語源のとおり、弟子や師、友、そして家族の一言一行が、酒井さんにとって本当にありがたかったのだ。

光を失っても書道を続けられるということは、めったに無い、ありがたいこと。深く、温かい人の縁とともに歩んできた道も、めったに無い、ありがたいことなのだ。

ありがたいは有り難しこと

私の人生を変えた恩師



蛭田小学校教員
藤田純子さん

酒井先生は私の中学時代の校長先生でした。国語の授業には、各クラスを回って水書板に模範の書を書き、長期休業前には、生徒全員に一枚一枚手本を書いてくださいました。いつも生徒と近い存在で、

私達に与える影響は大きいものでした。

昨年1月、個展のギャラリートークで「観達」の書を制作した様子を再現してくださいました。大きく息を吸って吐く勢いとともに、体全体を使って表現する姿は、私が中学時代に見た情熱と全く変わりがなく、鳥肌が立ちました。

作品すべてに酒井先生の熱い魂が込められている。そう改めて感じました。

思いやりと包容力に惹かれます



抱原会代表理事
塩野玄機さん

先生の目が不自由になる前の稽古は、まず良い点にマル、それから直して下さるという思いやりあふれる指導でした。今は作品がみえなくとも、弟子の疑問には口頭で直ちに助言してくださいます。

「初生涯忘不可(しよしんしょうがいわするべからず)」は先生の門下生私たちの今年の指針です。先生は、「この言葉は自分への戒めです。米寿を迎え心新たに自分の書に向かう。」とおっしゃいます。「どうも思った線が出なくてね、書いた字も見えなくてね。」など口々にされつつ、納得するまで何百枚と書き、一点一画に思いの詰まった作品を仕上げられます。私たちは、その気概や、思いのこもる指導、包容力に惹かれ、学ぶ力を頂いています。

酒井真沙を慕う人々

酒井真沙 略歴

- 一九二六年 大田原市に生まれる
- 一九四三年 大田原中学校(高校)卒業
- 一九四五年 栃木師範学校本科卒業 那須郡金田村奥沢国民学校訓導
- 一九五七年 独立書人団代表 手島石郷氏に師事
- 一九六三年 選抜全国展(文化庁主催)第一席文部大臣賞
- 一九六六―一九六七年 日展入選
- 一九七〇年 抱原書道会設立
- 一九八五年 毎日展最高賞会員賞
- 一九八九年 独立会員展会員賞
- 一九九〇年 独立書人団栃木支部結成 初代支部長
- 二〇〇三年 大田原市書道連盟設立 初代会長
- 二〇〇五年 毎日展審査会員 栃木の会 結成 初代表
- 二〇一三年 第6回おわたわら美術館 大田原市と芸術家のありかたシリーズ④ 書家 酒井真沙展 現代の書・少数字の世界、開催
- (現在)
 - 財)独立書人団 参与
 - 栃木独立相談役
 - 毎日展 参与 会員
 - 栃木県書道連盟 名誉顧問
 - 下野書道会 特別顧問
 - 大田原市書道連盟 顧問
 - 抱原会 主宰